書評

中村喜和、長縄光男、沢田和彦、ボダルコ・ピョートル編

『異郷に生きる Ⅵ』

―来日ロシア人の足跡―

先頃百回の例会を最後におよそ21年にわたる活動に終止符を打ち、休会となった来日ロシア人の会が刊行してきた『異郷に生きる』シリーズの最後となる一冊である。今回も多岐にわたるテーマを多くの研究者がそれぞれのスタンスで追いかけている。来日ロシア人という枠だけで、これだけ多彩なテーマがわき上がってくることに驚かされる。小さな点のようなテーマを深く掘り下げていくなかで、思いがけない真実が浮かび上がってくる。

ロシア人との豊かな関係綴る

沢田和彦の外事警察記録を丹念に追いかけた論考を通じて、来日したロシア人の詳細な動向が、シュラトフ・ヤロスラフによって、東洋学者コンラドとポリヴァーノフが来日した時にロシア軍部から調査依頼を受け報告を求められていたことが明らかになった。またパールィシェフ・エドワルドの調査により、第一次世界大戦期にロシアと日本が急接近し、ロシアが日本に武器を買いつけに来ていたことを知ることになった。

さらに自らの個人的な体験や縁によって、来日ロシア人の思い出を語るエッセイもある。六本木の赤ひげと言われたアクショーノフ医師の思い出を語る中で、彼にかけられていたスパイ説が根拠のないものであることを飯島一孝は明らかにした。女医ビニロビによって難病を克服できた熊谷敬太郎の彼女の半生をたどるエッセイにも言えることだが、実際に付き合ってきた人たちでないと書けないものばかりである。

従来、日露関係は政治や経済の視点からだけ考察されていた。しかしその土台は人と人の関係であったはずだ。江戸時代から現代まで日本人とロシア人は豊かな関係を結んでいたことを、この書は語っている。未来にもつながっていくのはこの豊かな関係をしっかりととらえていくことではないか。「日本人にとっては「ロシア」への、ロシア人にとっては「日本」への、敬愛の念だけを唯一の参加資格とする」会だからこそでき得たものである。

百回を期して休会という中には、新たな世代に次を担ってもらいたいというメッセージが込められている。これに応える人たちが早く登場することも期待したい。

16年9月刊、成文社、357頁、3600円＋税

大島幹雄（石巻学プロジェクト代表）